前期　文系

平成三十年度入学試験学力検査問題

国語

（人文社会学部、法学部、経済経営学部　経済経営学科　一般区分、
都市環境学部　都市政策科学科　文系区分）

（一二〇分）

答案用紙　三枚

注　意

一、監督員の合図があるまで、問題の内容を見てはいけません。

二、受験番号及び氏名は、答案用紙の所定欄に必ず記入してください。

（例）
受験番号
1234567X
の場合
↓

		1	2	3
4	5	6	7	X

三、解答には黒鉛筆またはシャープペンシルを使用し、必ず配付された答案用紙に記入してください。
答案用紙には、解答に関係のないことを記入してはいけません。

四、試験中に不鮮明な印刷等に気付いた時は、手をあげて監督員に申し出てください。

五、答案用紙を切り取ったり、持ち帰ったりしてはいけません。

六、問題冊子の余白は利用可能ですが、どのページも切り離してはいけません。

七、問題冊子は、持ち帰ってください。また、試験終了時刻まで退室できません。

[illegible]

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

※亭子の帝、※鳥飼院におはしましにけり①。例のごと、御遊びあり。「このわたりのうかれめ※ども、あまたまゐりてさぶらふなかに、(1)声おもしろく、よしあるものは侍りや」と問はせたまふに、うかれめばらの申すやう、「※大江の玉淵がむすめと申す者、めづらしうまゐりて侍り」と(a)申しければ、見せたまふに、(b)さまかたちも清げなりければ、あはれがりたまうて、Ⅰうへに召しあげたまふ。「そもそもまことか」など問はせたまふに、鳥飼といふ題を、みなみな人々によませ②たまひにけり。おほせたまふやう、「玉淵はいとらうありて、歌などよくよみき③。(2)この鳥飼といふ題をよくつかうまつりたらむにしたがひて、まことの子とはおもほさむ④」とおほせたまひけり。(c)うけたまはりて、すなはち、

※あさみどりかひある春にあひぬればかすみならねどたちのぼりけり

とよむ時に、帝、ののしりあはれがりたまて、御しほたれたまふ。人々もよく酔ひたるほど⑤にて、酔ひ泣きいとになくす。帝、御袿ひとかさね、はかまたまふ。「ありとある上達部、みこたち、Ⅱ四位五位、これに物ぬぎてとらせざらむ者は、座より立ちね」とのたまひければ、かたはしより、上下みなかづけたれば、かづきあまりて、ふた間ばかり積みてぞおきたりける。

かくて、(d)かへりたまふとて、※南院の※七郎君といふ人ありけり、それなむ、このうかれめのすむあたりに、(3)家つくりてすむと聞こしめして、それになむ、のたまひあづけたる。「かれが申さむこと、院に奏せよ。院よりたまはせむ物も、かの七郎君につかはさむ。(4)すべてかれにわびしきめな見せそ」とおほせたまうければ、(e)つねになむとぶらひかへりみける。

（『大和物語』より）

※注
亭子の帝＝宇多天皇（八六七～九三一、在位八八七～八九七）。光孝天皇第七皇子。
鳥飼院＝摂津国嶋下郡（大阪府摂津市）にあった離宮。　うかれめ＝遊女。
大江の玉淵＝大江音人の子。日向守、少納言、従四位下。　あさみどりかひある…＝歌題「とりかひ」を隠す。隠題歌。
南院＝光孝天皇第一皇子是忠親王を南院親王、南宮という。　七郎君＝是忠親王七男。

問一　波線部（1）～（4）を現代語に訳しなさい。

問二　傍線部①～⑤の助動詞の意味を次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　自発
イ　可能
ウ　使役
エ　断定
オ　完了
カ　意志
キ　過去

問三　二重傍線部(a)〜(e)の主語にあたる人物を次の中から一つ選んで記号で答えなさい。答えは同じ記号を何度用いてもよい。

A　亭子の帝
B　うかれめばら
C　人々
D　大江の玉淵
E　大江の玉淵がむすめ
F　南院の七郎君

問四　傍線部Ⅰについて、帝が殿上のそば近くに召し寄せた理由を説明しなさい。

問五　傍線部Ⅱについて、なぜこのような状況になったのか、説明しなさい。

問六　破線部「御しほたれたまふ」について、その理由を問題文の内容に即して一〇〇字以内で答えなさい(句読点も字数に含める)。

[illegible]

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「時の流れ」が河の流れに喩(たと)えられるとき、そこではつねに、不在の未来が現在へと流れ来て、現在がやがて過去というもう一つの不在へと流れ去るという事態が思い描かれている。わたしたちにとって河が流れとしてあるのは、川上から流れ着き、ようやっと姿を現わした川面(かわも)の漂流物を目前に眺め、やがてそれが去ってゆくこと、視野から消えてゆくさまをまじまじと見つめることによってである。その意味では、何かの到来もそうだが、とりわけ、あるものの消失の経験、離別の経験こそが〈時〉の移ろいを浮き立たせる。だから、つねに「いま」が<u>フットウ</u>(ア)している乳児には〈時〉はない。じぶんにとってなくてはならないもの、大切な人、そういうものがじぶんからむしり取られてしまうという痛い経験のなかで、ひとは何かの不在を思い知らされ、〈時〉の移ろいに感じ入る。消えたものへの思い、そこに〈時〉は訪れる。そういう意味では、時間を論じるときに、ひとはつねに何ものかの到来を待ち受けるこの「いま」、そして何ものかの消失の起点となるこの「いま」というものを始点とするほかないようにおもわれる。

未来という不在が流れ来ることも過去という不在へと流れ去ることも、それぞれ「まだない」と「もうない」として、「いま」という現在において意識されていることがらである。その意味で、「まだない」不在の未来もそのようなものとして語られるかぎりでは現在においてである。おなじ意味で、「もうない」不在の過去も現在においてである。そんなふうに「いま」(現在)こそが「時の流れ」の火床であると考えたのが、フッサール※の現象学の時間論である。

では、その「いま」は流れをどのように感受しているのか。どのように駆動しているのか。まだない未来と、いまここにある現在と、もうない過去との関係は、「流れ」としてまるで一本の線のように結びあわせて語られるかぎりで、じつは現在(予期)と現在と現在(想起)の関係である。そう考えれば、(A)<u>なんと時間は流れるのではないことになる。</u>いいかえるとここでは、「流れ」を時間の外から「流れ」として眺める意識(観測点)じたいは時間的だとは考えられていない。だから「時が流れる」ということで問題なのは、流れている者が流れのなかで流れるままにそれを流れとして捉(とら)え、ひるがえっておのれをも流れるものとし

て捉える、そのような時間意識のしくみだということになる。いってみればそれは、歌い終わった旋律が未だたなびきつづけ、さらにこれから口ずさむ旋律を予感しつつ、いままさに歌われている歌唱のようなものである。それをフッサールは、(それ自身が時間流である)意識による「時の流れ」の構成という問題として捉え返した。対象として意識の前で流れる時間ではなく、流れるものとしての時間が自己自身を流れるものとして構成するのはどのようにしてかという問いである。

「流れ」は、何かの移行として感受される。それはいまあるものが未だないものを含み、さらにいまあるものがもはやないものへとおのれを消し去ってゆく運動である。フッサールは「いま」(現在)を、そのように、いまあるものと、未だないもの、もはやないもの、この三つの①契機がたがいに含みあい、溶けあうような現象として捉えた。そしてそれを「いきいきとした現在」(lebendige Gegenwart)と呼び、そこに流れることと立ちどまることとが同時に起こっているような時間の根源(Ursprung、まさに湧き出る泉である)となるあり方を見た。「流れる現在」とは、たえず「いま」でなくなる、つまりもうないものへと流れ去る「いま」のあり方であり、「立ちどまる現在」とは、まだない未来をたえずおのれのなかに呑み込むものというかたちで(イ)コウジョウ的に現在でありつづける「いま」のあり方である。「いま」として自己を同一的なものとして反復しながら、同時に「いま」でないものとしてたえず消え去る(自己が自己でなくなる、つまり自己を差異化する)「いま」のそのような②両義的なあり方に、(B)「時が流れる」ということの実質を見た。いいかえると、「時が流れる」というときのその移行性は、たえず滑り落ちてゆくこととつねに新しくあることとの二重性、つまりは現在が非現在へと移行することとして理解したのである。そして、つねにみずからであろうとしながら、たえずみずからでないものへとたえず自己を超えてゆくという、そのような動性こそ時間の推力であるとしたのである。「いま」をコアとして「時の流れ」を見るいわゆる現象学的時間論である。

(C)しかし、ここには決定的ともいえる二つの問題が潜んでいる。

一つは、「時の流れ」がこのように捉えられるにしても、その未来・現在・過去という三つの契機をたがいに含ませ、溶けあわせるようななにがしかの動性があるから時間が流れるのか、それとも時間が経過もしくは推移するそのなかで意識が「いま」を拠点として時間を「まだないもの」と「もうないもの」との関係として再構成するのか、という問題がそのまま残る。つまり、

意識が時間の根拠なのか、それとも時間が意識の根拠なのかという問題である。とりわけこの問題が顕在化するのは、(D)未来というもののあり方をめぐってである。未来はフッサールが考えたように、現在が予期というかたちであらかじめ未来を呑み込んでいるというよりも、むしろ逆に、予期というかたちで描かれる未来はじつはそれをしばしば裏切るかたちで、不意に訪れるのではないかということである。そうだとすると、未来という非現在は、現在との連続からではなく、現在との(ウ)ダンゼツからも主題化されねばならないことになる。未来は現在という時点においてその到来が予期されるものではなく、あらかじめ描きようのないもの、不意を(エ)オソうかたちでわたしたちをとらえるもの、その意味でいかなる現在をも逃れ去るものとしてあるということになる。そうなると、「時の流れ」は「いま」という火床のなかで構成されるものではなく、もはや構成不可能な根源的事実としか規定しようがない。時間とは「まだないもの」が「いまあるもの」となり「いまあるもの」がそのまま「ないもの」に滑り落ちる移行そのものであり、「いま」に特権的な位置価があるというものではない。現象学の時間論はここでその限界に立ち到る。

いま一つの問題は、フッサールが「いま」として捉えている現在がどのような幅をもったものなのかということである。フッサールは、現在を不在を呑み込んでゆく運動として捉え、未在と既在を含み込み、それと溶けあうような「時間の庭」というものを想定していた。そのかぎりで、現在はそこから未来と過去とを区切る③分水嶺のような「点」としてあるのではなかった。音楽でいえば、次にすぐ聞こえてくるような音とともに、たったいままで聞こえていた音をもまだ現在につなぎとめている、そういうはたらきが「いま」の時間意識にはあるのであった。それをフッサールは「未来予持」(Protention)と「過去把持」(Retention)と呼んでいる。その二つが現在には含まれるというのである。だからこそ「いま」は「庭」をもつとしたのである。

Protention/Retentionというのは意味(オ)シンチョウな語で、ともにラテン語のtentioという語を含んでいる。tentioとは「張り」もしくは「伸張」を意味する。「時間の庭」とはだから、「いま」というもののこの「張り」、この「伸張」の幅のことである。この幅を規定しているものは何か、という問題がここから出てくる。いいかえると、時間に過去・未来・現在という隈取りを与えるもの、時を区切るものが何かという問題である。

（鷲田清一『哲学の使い方』より）

※注　フッサール＝ドイツの哲学者（一八五九～一九三八）。現象学の創始者。

問一　傍線部（ア）～（オ）のカタカナの部分を漢字で記しなさい。

問二　傍線部①～③のことばの意味を説明しなさい。

問三　傍線部（A）とはどういうことか、問題文に即して説明しなさい。

問四　傍線部（B）とはどういうことか、問題文中から一五字以内で抜き出しなさい。

問五　傍線部（C）の「二つの問題」とは何か、問題文に即して説明しなさい。

問六　傍線部（D）についての筆者の考え方と、フッサールの「未来」の考え方の違いを問題文に即して七〇字以内で説明しなさい（句読点も字数に含める）。

三

次の文章を読んで、考えるところを四〇〇字以内で述べなさい（縦書きにしなさい）。

フランスの女性ジャーナリスト、フランソワーズ・ラボルドがラジオで話している。フランス代表のサッカー選手にもラグビー選手にもインタビューしてきたが、いつも感じるのは、ラグビー選手とは話がはずむのに、サッカー選手とはそうではないということ。なぜだろうと考えて思い至ったのが、小学生のころからサッカーの英才教育を受けてきた選手たちには、サッカー以外の経験がほとんどないということだった。感じのいい人たちであるのは間違いないが、話題の豊富さという点では、ラグビー選手のほうが明らかに上だ。

フランス代表に選ばれたラグビー選手の中には、サッカー選手と違ってほかに仕事を持っている人が少なくない。消防署員だったり、薬剤師だったりする。仕事を持ち、ごく普通の生活を送っている人たちだ。引退したサッカーのジネディーヌ・ジダンに迫る人気の花形選手、セバスチャン・シャバルは、今でこそラグビー専従だが、職業学校を出て、旋盤工・フライス工として働いていた。

ジャーナリストの出した結論は、人生経験が話題を豊富にする、というごく当たり前のことだったが、このことはもっと重要視されてもいいと思う。もちろん、何もかも体験しようとがんばる必要はない。だいいち、そんなことは不可能だ。

いきなり応用問題を解こうとしても歯が立たないが、基本的な問題を解いているうちに応用問題にも正解が出せるようになる。言語コミュニケーションでも同じことが言える。基礎練習という体験を積むことが発想の幅を広げることに寄与する。基本的な訓練中に想像力が養われて、応用問題の解けるレベルに達する。

基礎体力がなくて基本的な練習もしていない人がいきなりスポーツ万能になれないのと同じで、敬語を使いこなせるようになりたければ、敬語以前の日本語能力、コミュニケーション能力をつけることから始めたい。知識もおろそかにできないが、知恵と創意工夫はもっと重要だ。そして、これらは机の上の勉強だけでは身につかない。

世の中が変わって、言語コミュニケーションの経験を積むのが容易でなくなってきたのは事実だ。習慣化されれば苦労する

ことなく身につくが、経験したくとも、習慣自体が時代とともに消滅してしまうこともある。それは、電話でのやりとり一つとっても言えることだ。

携帯電話では、知り合いであればかけてきた人の名前が画面に表示されるから、かつてなら電話をした側が必ず言っていた言葉を、ことごとく省略することが可能になった。電話の代名詞だった「もしもし」という呼びかけも、今では言わない人が多い。「鈴木さんですか」と相手を確認する必要もない。「佐藤ですけど」と名乗らなくてもよい。相手のほうから、開口一番、「ああ、佐藤さん、どうしたの」とたずねたり、「お疲れ様です」といきなりねぎらったり、「ごめん、まだ終わってない」などと謝ったりするのだ。

携帯電話が普及する前は、中学生や高校生が友達と電話で話したいと思ったときに、必ず通らなければならない関門のようなものがあって、そのための敬語を身につけざるを得なかった。最初に受話器を取る可能性のある、友達の家族、特に親、特に父親への口のきき方を学ぶという「通過儀礼」だ。

友達の母親とはある程度気心も知れていて、「タロウですけど」と言えば、「あら、タロウちゃん、元気？　ちょっと待ってね」と、すぐに友達を呼んでもらえた。または、タロウの近況や家族の安否が話題になって、ひとしきり、言ってみれば世間話をしたものだ。親しい友達の母親でも、他人であることに変わりない。そのような存在と言葉を交わすことによって、他者とのコミュニケーション経験を積むことができたのだ。

（野口恵子『バカ丁寧化する日本語』より）